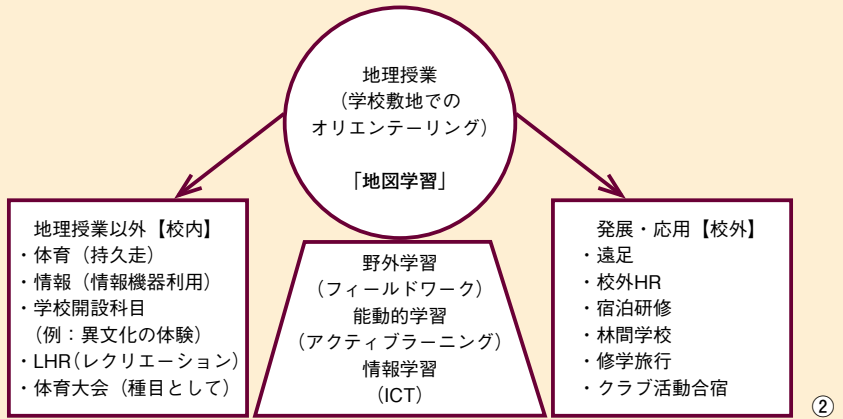
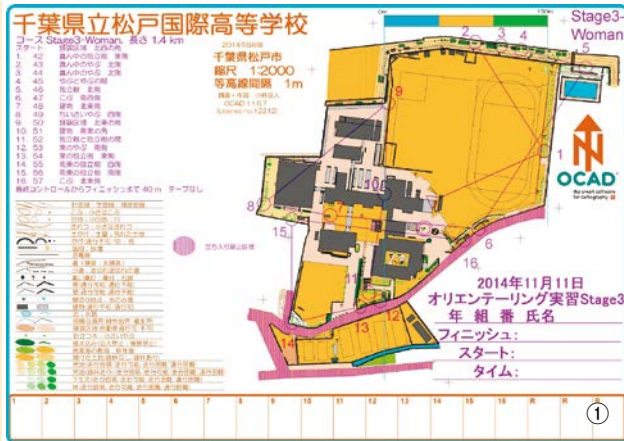


地理の授業でオリエンテーリング

写真・文 千葉県立松戸国際高等学校 小林 岳人



東日本大震災、広島土砂災害、御嶽山噴火、関東・東北豪雨など、変災からの直接的な避難の重要性もさることながら、地域を空間的にとらえることも不可欠である。変災に限らず空間の把握とその中での移動（ナビゲーション）は、現代社会のあらゆる諸活動において必須である。そのためには、地図が読めることが大前提であり、それには実際の風景と地図とを照合させるという実用的な使用が必要である。このスキルは人間にとって生きる力そのものであり、学校における教育活動の中に位置づける必要がある。地図という専門性が高いツールを使用することから、その役割は地理がふさわしい。また、このスキルにはフィールドワークが必要である。

これらの課題は、オリエンテーリングによって統合的になすことができる。オリエンテーリングは、地図を利用して絶え間ない現地照合を行い、現在地を把握し目的の地点への到達を競いあうスポーツである。山林以外に公園や市街地、大学キャンパスなどでも競技化（スプリントオリエンテーリング形式）され、ルールや地図図式などが整備された。この形式は初心者にも安全で、また短時間でもナビゲーションの本質が実感できる。専用機材（③）の利用によって、担当教員1名で授業のクラス生徒（40名程度）に対して、50分の授業時間内にオリエンテーリング実習が可能である。そこでオリエンテーリング実習を学校敷地にて実践した。まずは慣れ親しんだ環境にて基礎基本の技能を習得する、という考え方である。実習は（1）事前準備（専用地図（①）作成・コース設定⇒（2）事前授業…ビデオ視聴・説明⇒（3）当日準備…コントロール設置⇒（4）授業…準備運動、用具（④）配布、実習（⑤⑥⑦）、集計、整理運動⇒（5）撤収、結果掲示⇒（6）事後授業…反省用紙記入、からなる。実習はコースを変えて3回行った。学校敷地といえども精細に表現された地図を使うことは生徒にとっては初めてでもある。

初回の感想には「地図をよく読むことが必要」という記述が多く、2回目以降の感想には「地図読図能力の向上を実感」や、速くなるために「読図と走る速さのバランスが必要」「地図と周囲の風景の照合」といった記述がされ、3回目には「よい経験」「達成感」「本格的に林の中でやってみたい」の他「生活の中への応用」「知らない場所でどう使えるか」「災害時への心得」などここで得た読図技術の生かし方についての記述がされるなど、効果がみられた。

競技という空間によって、教科を越えた体育との関係が見出され、迫真の読図もまた要求される。個人で行うので、個々の判断も要求され、生徒たちは自ら学ぶ（アクティブラーニング）。専用機材は生徒へのリアルタイムのフィードバックにも役立ち、本格的地図やコース設定等はよりよい教育効果のために不可欠である。専用機材の利用は情報機材の活用という観点で情報教育とも関係する。遠足・宿泊研修・修学旅行など校外での学習活動に際しての事前学習として位置づけられよう。海外のように見知らぬ土地・慣れない環境への適応にもナビゲーションは有効であり、グローバル人材育成においても欠かせないスキルである。オリエンテーリングは総合的な学習という観点も備える（②）。

実践に際しての地図作成、機材利用、コース設定などは、日本オリエンテーリング協会による指導者講習会（オリエンテーリングインストラクターなど、詳しくは<http://www.orienteering.or.jp/leader/>を参照）の受講が効果的である。地図学習を支えてきた国土地理院の地形図は大きく変化しており、地図学習は転機を迎えている。オリエンテーリング用地図はナビゲーションに特化した地図ということから学習教材としてもふさわしい。学習内容に応じた地図を作製するという観点でGISの考え方にも合致している。世界共通の地図図式であるということも注目である。